

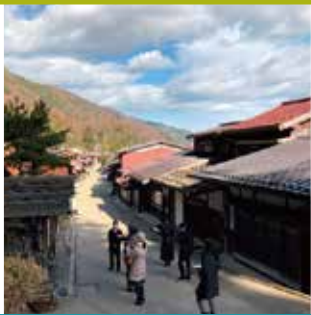


KAWACHI
NAGANO

木の文化・木のおもてなし
ガイドブック2020
【木のおもてなしツアーのつくりかた】



YAMAGATA
OKITAMA



KISO-
HIRASAWA
NARAIJUKU



INAMI



「木の文化・木のおもてなし」の考え方

▶ 目次

「木の文化・木のおもてなし」の考え方 — 2

先導モデルの3つのパターン — 3

地域での展開タイプ — 3

4地域のモデルツアーについて — 3

木の恵み祈り

～江戸時代から続く河内林業と里の暮らし～ — 4

山形・置賜

～木地師と草木塔の故郷を訪ね、木を暮らしに活かす～ — 10

信州 木曾平沢・奈良井宿

～山深く 出会い深く「木のおもてなし」丸ごと体験の旅 — 16

木彫りの里・井波

～木の香りの旅～ — 22

木のおもてなしツアーのつくりかた — 28

木の文化・木のおもてなしの発展へ向けて

～検討委員からのメッセージ — 30

モデルツアー映像紹介 — 31

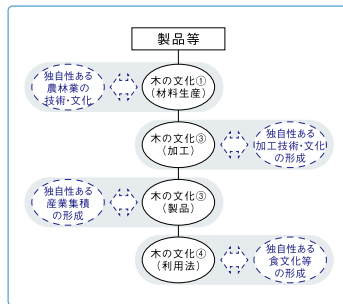
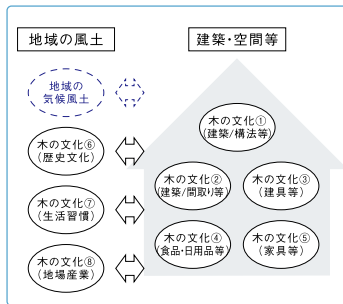
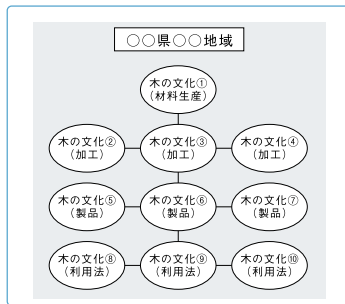
2018、2019 事業紹介 — 31

日本は古来より生活のあらゆる場面で木を使い、木に親しんできました。それらは暮らしの有り様や衣食住と一体化したものであり、必然的なものであったに違いありません。本事業では、日本が培ってきた「木の文化」とそれを活かした多様な「木のおもてなし」について、来日観光客を始めとした来訪客へ新たな形の「木の文化」と「木のおもてなし」の創造・発信を目指す取り組みを進めています。

そのためには、木を用いた伝統工芸や伝統的建築物に「木の文化」に着目した「新たな視点や価値」「ストーリー性」を付与し、体験や購入などのソフトプログラムと一体化した工夫をしたり、地域材を使った建築物、空間、製品等に「木の文化」に着目した「地域の個性や特徴」「歴史や人、技術などの価値」を付与し、体験や購入などのソフトプログラムと一体化した工夫をしたりすることが大切です。

これらを満たすことで、日本の「木の文化」を活かした建築・空間・製品等による「木のおもてなし」を実現し、新たな観光需要の創出や新たな木の建築物等の価値・魅力と需要の喚起、木製品の価値・魅力と需要の創出につなげていくことを目指しています。





パターン1:地域集積モデル

多様な「木の文化」を支える技術・製品群等が面的な集積された地域(建築・建具・家具分野)

地域において、木の文化を支える材料生産から加工技術、製品や材料を活かした建築、その利用法までが集積し、それぞれが関係性を持ちながら、地域の特性や個性につながっているもの。

パターン2:拠点発信モデル

多様な「木の文化」が集積されている建築物・空間・街並等(観光分野-交通・宿泊等、まちづくり分野-文化・交流等)

地域の気候や地理、民俗や風習、地場産業などが木を使った建築物等の構法や間取り、設備、建具や家具、日用品等に活かされ、そこでの暮らしを支えたり、来訪者の滞在や体験、交流へつながっているもの。

パターン3:異分野連動モデル

周辺分野の技術・文化と連動して、多様な文化の派生に寄与する製品等(食分野、伝統工芸分野)

木の文化としての材料生産や加工、製品、利用法などが農林業や加工技術、産業や食文化などの周辺分野と時には地域をまたいで連動し、独自の発展・進化を遂げて、多様な文化を生み出しているもの。

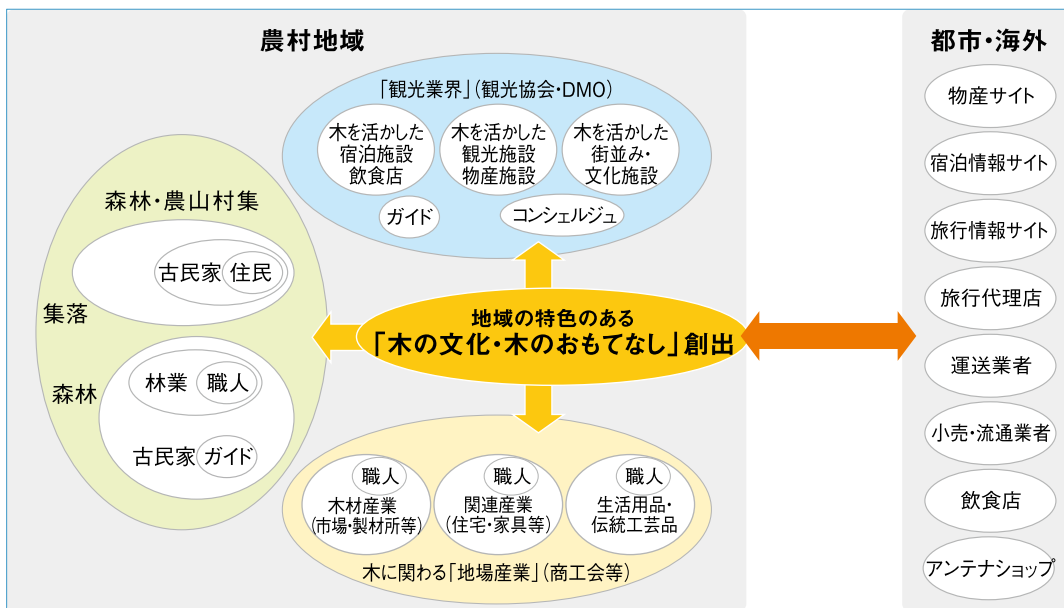
【先導モデルの3つのパターン】(図上)

これまで調査・分析した各地域、各分野の事例から、先導モデルとして3つのパターンを考えました。これらを組み合わせたり、進化させたモデルも考えられます。地域が持つ木の文化の要素を活かして、多様な分野・多業種が関わり、ハードとソフトを巧みに融合していることが大切です。

【地域での展開タイプ】(図下)

さらに、観光分野、地場産業、森林・林業関係者主導、施設・ガイド主導などの地域の展開タイプに基づき、「木のおもてなし」の地域での推進体制フローを提案しました。

- ① 「観光分野」(観光協会・DMO)が主導する場合
- ② 「地場産業」(木材業界・伝統工芸等)が主導する場合
- ③ 「森林・林業関係者」が主導する場合
- ④ 森林等の「施設・ガイド」が主導する場合
- ⑤ その他(都市部の小売・流通業者、飲食店等が主導する場合(産地見学))



【4地域のモデルツアーについて】

上記の考え方を踏まえ、今年度のモデルツアーを募集・採択し、4地域のツアーを実施しました。各事例の紹介の最後のページには「ワークシート」と「今後の展開のフロー」が記されています。「木のおもてなしツアー」を構築するために、実施者のビジョンや思い、地域の資源や既存のプログラムなどを抽出し、様々な要素を組み合わせることでツアーをつくりだしたプロセスが読み取れます。P28からの「木のおもてなしツアーのつくりかた」にワークシートの活用方法を記載しました。これらを活用して、地域のオリジナルツアーの企画に取り組んでいただければ幸いです。

木の恵み祈り ～江戸時代から続く河内林業と里の暮らし～

【モデルツアー】

河内長野市

河内長野市には、江戸時代から約300年続く河内林業が今も営まれています。この河内林業は、大阪城築城時に始まりました。築城時、木材を納めると同時に、天見エリアから同時に木工職人も派遣されました。その職人が建築した数寄屋建築が今も存在しています。天見エリアは、大阪の中心部「難波」から電車で40分ほどのところにあり、大阪でありながら江戸時代から続く里の祈りと木の文化が今も地域の人々の暮らしに根付いている稀有な地域です。

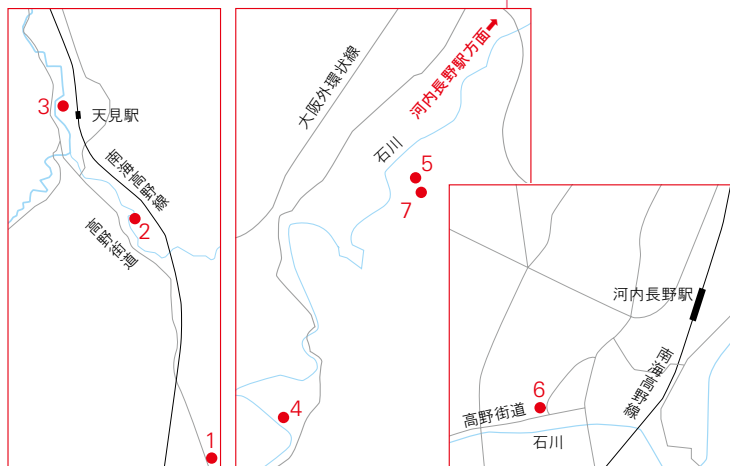
ツアーMAP

紀見峠～遣り水不動尊①→蟹井神社②→南天苑別館「久右衛門」→あまみ温泉南天苑③→島の谷堀切家-菊水産業④→河内長野市立林業総合センター/木根館⑤→西條酒造⑥→大阪森林組合 木材共販所⑦



紀見峠より林地内へ

大阪府と和歌山県の県境/紀見峠より直ぐの林地内へ入り、河内長野の林業と木材の話をお聞かせします。市内の7割が森林、その内7割が人工林で、施業方法、気候風土により木目が均一な良材が採れます。この森では「森林ESD」の学びの場にもなっています。



林道から遣り水不動尊へ

林道を20分。森の恵み、水源となる神聖な地に祈りの不動尊「遣り水の不動尊」があります。水の恵みは峠をまたいだ地域で享受されてきたことから、今もその地域の人々に手厚く守られています。



心と身体をリフレッシュ、森ヨガ体験

遣り水不動尊の前をお借りして、森林セラピーガイドであり、ヨーガ療法士でもある倉橋陽子氏の指導のもと、森ヨガを体験します。木々の香りを感じながら、心地よい時間を過ごします。



蟹井神社

里は森林に守られ、木と共に生きた文化が色濃く残っています。里を守る蟹井神社は、代々修繕に使われるための材木を育む保有林が存在しています。



南天苑別館「久右衛門」の数寄屋建築

この後、訪れる南天苑の別館「久右衛門」(中村家/後出)は、宝暦14年(1764年)頃の数寄屋建築です(部分により年代は異なる)。現在所有する南天苑の女将より、当時の職人の話や職人が絶えた話、地域での古民家の維持や必要性、また活用方法などについてお聞きしました。



「久右衛門」にてかんなのはなワークショップ

かんなのはなアーティスト大石聖子氏を講師にお迎えして、地元木材を薄く削ったかんなくずでバラを製作しました。作業を始める前、ロール状になったかんなくずで木の香りを体験します。バラはそれぞれの個性が出てユニークな作品に仕上がりました。



あまみ温泉南天苑

「久右衛門」より天見駅方面へ廃線跡遊歩道を通り、「あまみ温泉南天苑」へ。里山の風景を求めて、日本各地はもとより世界各国から多くのファンが訪れます。秋には名前の由来となった「南天」の実が赤く色づき、家々の塀でたくさん見られます。里の臨時収入になっていた文化が今も残り、この時期からはお正月の出荷準備が始まります。



島の谷堀切家

南天苑より廃線跡遊歩道をへて、南天苑別館「久右衛門」、蟹井神社を過ぎて徒歩30分。ツアー担当の堀切さんのご実家で、現在もお母様がお住まいの高台にある築220年以上の茅葺の民家です。見学した「久右衛門」と入口の土間の造りが似ており、この地域のこの時代の家は、ほとんどこの様式だそうです。屋根は波板で覆われていました。



クロモジの楊枝づくり

菊水産業㈱専務取締役の末延秋恵氏によるクロモジの楊枝づくりを見学、体験します。地場産業の「つまようじ」製造販売60年の歴史があります。伝統文化である茶道や和菓子で、日本のおもてなしには欠かせない「黒文字楊枝」ですが、今では国産ものはほぼ流通しておらず、国産化を目指し、原木の刈り出しから製造まで国内で一貫し商品化しています。自分で作った楊枝を使って和菓子を味わい、クロモジ茶で喉を潤します。



河内長野市立林業総合センター/木根館(きんこんかん)

河内長野駅より車で10分。「おおさか河内材」を通じた木との触れあい、ぬくもりを感じてもらえる場所が「木根館(きんこんかん)」です。カトラリー、お箸セット、貯金箱など、専任のインストラクターが付いて、初心者でも安心しておおさか河内材を使った木工体験ができます。



西條酒造「天野酒」酒蔵どおり

河内長野の唯一の酒蔵「天野酒」の酒蔵どおりにも、毎年11月中旬ごろに、おおさか河内材の杉でつくった杉玉が並びます。杉玉は、新酒が出来上がる頃、酒蔵の軒先に飾られる杉枝を玉のようにかたどったもの。とおり周辺住民の軒先にも、酒蔵、住民たちとボランティア団体、森林組合が連携し、材料の調達、制作、飾り、その後回収し、アロマの抽出液へと活用、といった循環型の取り組みを何年も継続しています。



大阪森林組合 木材共販所(南河内郡千早赤阪村中津原)

大阪府内で唯一、原木の競り売りをを行う施設。おおさか河内材を中心に大阪府内の森林から伐採された丸太が競りにかけられます。年間約20回開催されており、競り人と買い方の熱いやり取りが展開されます。

地域の「木の文化」を活かした「木のおもてなし」ツアー 企画化【ワークシート】

木の恵み祈り ～江戸時代から続く河内林業と里の暮らし～

【実施主体のポテンシャル】

【地域の森林・林業・木材産業の状況】

人工林70%、山主の世代交代、大工職人以外の加工職人の不在

【実施主体の想い、ビジョン・将来展望】

都会から近い森だからこそその観光、教育、健康の切り口から森林サービス産業を作り上げ、林業の副業化、ソフト事業の副業化を目指す

【連携組織の想い、ビジョン・将来展望】

すでに各組織で行っていたコンテンツを地域がつながることで、地域の魅力発信、新たな事業化へつなげる

【地域の観光産業・伝統文化等の状況】

水質AAの水汲み場、水質を生かした酒蔵、国宝、重要文化財の木造建築、つまようじ産業

【地域の「木の文化」のポテンシャル】

河内林業は江戸時代から300年続くこと、中世の寺社仏閣の国宝、重要文化財を備えた鎮守の森があること、森の恵み、水源となる神聖な地に祈りの不動尊「遣り水の不動尊」、茅場の保全と活用が存続していること、光滝寺の炭焼不動、葛城修験などの流れをくみ山々には祠を守る集落が存在、江戸時代からの古民家集落、水源が多く水車を利用した集落がある、つまようじ生産量日本一

地域の「木の文化」の基本コンセプト

木の恵み・祈り～江戸時代から続く河内林業と里の暮らし

各要素を繋ぐ視点

地域が守ってきた神羅万象への祈りの里文化と里に残る丁寧な木のある暮らしでおもてなし

【地域の観光・交流のポテンシャル】

森林ESDプログラム、蟹井神社の境内で森ヨガと森林セラピー要素を取り入れた森の散策、南天苑や南天苑の別館である久右衛門で日帰り森ヨガリトリートプログラム、茅場の山焼きプログラム、木のある暮らし木工プログラム、辰野金吾氏設計の温泉旅館「南天苑」観心寺、金剛寺の中世木造建築物、かんなの削りを使ったアーティストによるワークショップなど現代の生活や暮らしに溶け込みやすい体験プログラム、クロモジづくりなど木のある暮らしを提案する体験プログラム

【要素】里と祈り「遣り水不動」

【視点】里は森に守られ、木と共に生きた文化

【内容】神社が保有し守られている林業の技がみられる山林、里と祈りが今もなお続く風景

【要素】南天苑別館「久右衛門」の数寄屋建築

【視点】江戸時代から続く河内林業と木工職人の技

【内容】当時の職人の話や職人が絶えた話、地域での古民家の維持や必要性、活用方法などを解説

【要素】クロモジの爪楊枝づくり

【視点】林業の副業として生まれた島の谷エリアに自生するクロモジの楊枝づくり

【内容】爪楊枝生産日本一である河内長野市に生きる、手作業によるクロモジの楊枝づくりの再現と削り体験

【要素】森ヨガ体験

【視点】森の持つ健康や癒しの効果を知る

【内容】インストラクターの指導による、森ヨガの体験

【活用可能なPR媒体、連携団体等】

大阪観光局、アンビュー、じゃらん、農協観光

（プロモーション手法）

体感施設で継続できるプロモーション手法等）

SNS、ウェブサイト、広報誌、アンビューやじゃらん体験サイト

（「木のおもてなし」プログラムの確立・実施）

（「木のおもてなし」プログラムの確立・実施）

大阪市内中心部から40分ほどの地域である河内長野市。江戸時代から続く木の文化、森林の恩恵を体験するツアー

（ツアー等のターゲット・実施形態）

30～50代の女性、アクティブシニアとしての60代。セグメント雑誌：天然生活、LOHAS、自遊人、通販生活、Lマガジン

参加者の声・反応や抽出された課題点

- 森ヨガやかんなのはなワークショップなどの体験プログラムは特に女性の参加者に好評であった。
- 行程や距離、時間などを事前に伝えて体力面での不安を払拭することも必要。
- 駅の近くにこれほどの里や森があることに驚かされた、また来たいという声もあった。

開発したプログラムの今後の展開案

- 日帰りツアーの人气が高かったため、リピーターの参加者が異なる参加者を連れてくるような仕組みを盛り込んだツアーを企画する。
- 都市部から近い本地域の特徴である「河内林業」の生業を体験してもらう日帰りツアーに取り組む。
- 地域の建築リフォーム会社との地域材利用促進のための認知拡大を目的とする勉強会ツアーも検討する。

今後の参加者の募集方法・プロモーション案

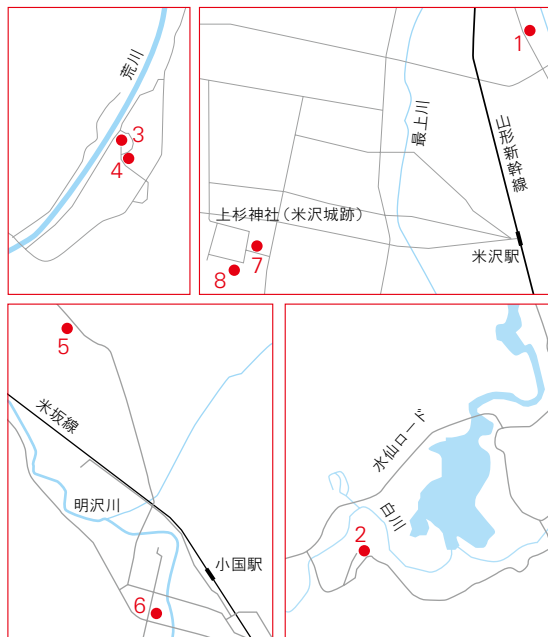
- 公式サイト、南天苑ウェブサイト、SNSを幅広く活用して参加を行う。
- ツアー講師等で関わっていただく方々を通じた告知や河内長野市広報を利用する。

山形・置賜 ～木地師と草木塔の故郷を訪ね、木を暮らしに活かす～

広葉樹に囲まれた山形県の置賜地域は木地師のふるさとであり、木地製作の歴史は1790年(寛政2年)に米沢藩の第9代藩主上杉鷹山が会津若松から木地塗物職人を招き、技術を習得させたことに始まります。多くの山村集落で木地師が活躍し、小国町五味沢地区では昭和30年代まで170年続いた生業の資料があります。現在の木工業ではけん玉、木製ブロック、笹野一刀彫、槐細工といった多様な製品がつくられ、旧米沢高等工業学校、上杉伯爵亭、熊野大社等の歴史ある建築も見られます。また「草木塔」が数多く建立された地域でもあり、自然への感謝の念が表れていることも特徴です。小国町には伝統的狩猟文化である「マタギ」が残り、森の信仰と野生鳥獣利用の一つのモデルとなっています。

ツアーMAP

アイタ工業①→源流の森センター②→白い森木工館③→白い森交流センター りふれ④→大宮子易神社⑤→野沢酒造店⑥→草木塔⑦→上杉伯爵邸⑧



広葉樹を知る

アイタ工業の相田社長、遠藤工場長より、広葉樹材の製材加工、商品化への取組みと課題について説明いただきました。現在、天然乾燥中の樹種を視察し、樹種特性等についても解説がありました。山形県産の広葉樹材は、建築用材として住宅のフローリング材やお椀、皿等の器としての製品も手掛けているとのこと。歩留まりが低いため、段階的な多様な利用を進めていく必要があると話されていました。実際にブナ材の製材作業も見ていただきました。





源流の森センター

木流(きながし)や昔の伐採・木地づくりの道具及び森林を構成する動植物等、管内の展示物について、源流の森インタープリター(講師)に説明いただきました。



木地師の話、マタギの話

「五味沢の木地づくり」という表題で、小国町教育委員会の蛸原一平氏の講演を「白い森 木工館」にてお聞きしました。小国町の森林率は96%で、ほとんどが冷温帯落葉広葉樹林です。なかでも主要なブナ林は、この地の生活と切り離せないもので、小国の人々が歴史的に培ってきたブナ林の自然資源を利用する生活文化を「ブナ文化」と呼びます。狩猟、川魚、山菜、キノコ、樹皮、樹木等の利用に関する技術、技法、知識を持ち、加工、保存、調理方法を継承してきました。そのために、規範、信仰、自然観をも人々は共有してきました。木地屋は、近江の国から伝わり、五味沢の歴史についても年代とともに変化してきたそうです。参加された皆さん、歴史的背景から道具の解説まで、熱心に聞き入っていました。

さらに、「白い森交流センター りふれ」では五味沢地区のマタギである齋藤重美氏からも話をお聞きしました。全国に残るマタギの系列や活動の違いがあること、強い山岳信仰を持ち厳しいルールがあること、初の女マタギが認められるまで三年を要したことなど、普段聞くことができない深い内容でした。熊の仕留め方や熊の生態やブナの大豊作との関係など普段聞くことのできないエピソードに興味を尽きません。



木工体験・木地師の実演

実演及びろくろ体験指導は木工館の渡部顕治氏、木工体験指導は渡邊英木氏、佐藤辰徳氏にお願いしました。木工体験は、渡部氏のろくろを使った体験、佐藤氏の糸鋸を使ったコースターづくり、渡邊氏の多樹種から材料を選んで作るペンダントと3つのコースから、好きなものを選んで体験しました。体験前に木地師の作業工程を、今も残されている実物を使って解説していただきました。複数のプログラムに挑戦する人もいて、皆さん集中して製作に取り組んでおり満足な様子でした。



大宮子易両神社参拝とブナ林散策

大宮神社はまだ700年代に現在の静岡県からわたり伝えられた神社で、その後、子易神社を合祀することになりました。これは安産の神で遠くから参拝される方が多いそうです。宮司の遠藤成晃氏から神社の歴史や守護神の説明がありました。解説後、周辺に林立する森林を巡りブナの森も体感しました。一部はスギ林ですが、大半は広葉樹林で高木としてはクルミ、ブナ、カエデ、等が見られ、低木層としては、オオカメノキ、ガマズミ、クサギ等が確認できました。





野沢酒造店

小国町唯一の造り酒屋である野沢酒造店を見学しました。野沢酒造店の塩川秀夫氏からは酒造りの工程と今昔の話を聞きました。酒造りには杉が多く使われているそうです。終了後に利き酒して各自土産に買って帰りました。



草木塔

置賜地域には古くから建材、燃料として木材の伐採や木流しといった生産行為が盛んに行われていましたが、このような歴史を背景にして、森林や木材に対する畏れや感謝の祈りが込められるようになったものが草木塔と考えられています(「一佛成道観見法界草木国土悉皆成佛」)。米沢市田沢地区で確認されている10基のうち最古のものと、もう1か所の2カ所をご案内いただきました。「おいたま草木塔の会」副会長の荒澤教真氏から、草木塔と仏教のつながりや建立の理由がどこにあったのかについて解説いただきました。



上杉伯爵邸

上杉伯爵邸は、一見、和風建築と思いがちですが、設計した中条精一郎氏は、西洋建築を習い軒高が高い構造としています。曲がり部分の天井板の構造も例が少なようです。中条精一郎氏は、米沢藩士中条政恒の長男で東京帝国大学工科大学で建築を学び、また上杉憲章に随行して英国に留学、ケンブリッジ大学で建築学を修了、慶応義塾大学図書館や東京海上ビルなど数多くの設計を担当しました。使用している樹種は、スギ、ヒノキ、ケヤキ、キリなどが見られますが、上杉の支配下にあった米沢では、スギは高価なものとの認識があり、一般人はスギを使えなかった時代もあったとのこと。

講師としてお招きした、米沢市文化財保護審議会会長等を歴任された白石信也氏から、印象深い解説として、「上杉藩時代から貧しかった米沢の繁栄に貢献した米沢絹織物に不可欠だったのは燃料となる木材だった」というお話がありました。絹織物は蚕の繭から作られますが、そのなかに「煮繭」(しゃけん)という工程があり、これには高温の蒸気が必要です。米沢ではエネルギー源として木材を燃料としました。木材が地域振興に貢献している歴史的な例と言えるでしょう。

地域の「木の文化」を活かした「木のおもてなし」ツアー 企画化【ワークシート】

山形・置賜～木地師と草木塔の故郷を訪ね、木を暮らしに活かす～

【実施主体のポテンシャル】

(地域の森林・林業・木材産業の状況)
森林面積と広葉樹の蓄積が県内4地域で最大、広葉樹材の用材利用は限定的、地元加工は少ない

(実施主体の想い、ビジョン・将来展望)
広葉樹の用材利用向上、川上・川中・川下のサプライチェーン構築、エンドユーザーの意識改革

(連携組織の想い、ビジョン・将来展望)
地域の目指す将来像の再構築、異分野連携や新しい手法の開発

(地域の観光産業・伝統文化等の状況)
上杉藩や米沢牛のイベント、無病息災を祈る「おさいとう」、飯豊・朝日・吾妻連峰を中心にした山岳観光及び連峰周辺の秘湯

【地域の「木の文化」のポテンシャル】

上杉鷹山公が推奨した木地師、小国町五味沢地区は生業として170年続いた歴史、森に対する畏敬の念を受け継ぎ、「草木塔」、山の戒律を守るマタギ文化、飯豊連峰・朝日連峰の山岳信仰、降水量(雨・雪)が多く、水資源も豊富、広葉樹の用材生産の増加、温身平は森林セラピー基地に認定、山菜・キノコが豊富で山村の貴重な収入源

地域の「木の文化」の基本コンセプト

木地師の繁栄と草木塔を偲び、木を暮らしに活かす

各要素を繋ぐ視点

木を育てる森と人のかかわり及び木材利用・木地師の歴史と現状を視て聴いて試して置賜の木の良さを暮らしに組み込む

【地域の観光・交流のポテンシャル】

木工体験(梶細工の幸林工芸や白い森木工館、源流の森のクラフト教室等)、木を活用した屋内遊戯場、公共建物の木造化・木質化、校舎・社寺仏閣・旅館等の歴史的木造建造物、木工・クラフト体験施設あり、木のおもてなしに特化した体感施設は少ない

【要素】木地師の歴史と暮らし
【視点】置賜に伝わった木地師とその流れ
【内容】上杉鷹山によって置賜に伝えられ170年生業として続いた木地師の歴史と暮らしを長老が語る

【要素】木で器を作る体験
【視点】木地師の技
【内容】実際に木工の体験をして木地師に近づく食器を作り、夕食で試してみる。轆轤を使った技の見学

【要素】森と木が育む暮らし
【視点】森の利用と伝統文化
【内容】小国に残るマタギ文化は信仰的な意味を持つ。伝統的文化絶やさないための取組みをマタギに聞く

【要素】森と人のかかわり
【視点】森への感謝と適正利用
【内容】森に対する畏敬の念として息づく「草木塔」を学ぶ

(活用可能なPR媒体、連携団体等)
(公財)山形県みどり推進機構、おぐに白い森(株)、株野沢酒造店、おいたま草木塔の会、アイタ工業、(株)ニューテックシンセイ、幸林工芸、山形県木材産業協同組合、小国町、小国町五味沢地区、小国町観光協会、山交観光(株)

(プロモーション手法)

体感施設で継続できるプロモーション手法等)
加工用木材の入手情報、木製品の製作・販売情報、木工体験施設及び観光ツアーも含めた木に親しみイベント情報をHP、SNS、マスコミ等を使って発信

(「木のおもてなし」プログラムの確立・実施)

(「木のおもてなし」プログラムの確立・実施)
木材利用と木地師の歴史、木地師の体験を通じて木に親しみ、地域文化と暮らしを通じて木と食・酒を楽しむ、自然と調和した文化及び森と木と食の利用を確かめ、木を暮らしに組み込む

(ツアー等のターゲット・実施形態)
首都圏等の人口過密地域及びインバウンド、体験ツアー方式で実施、現地の当事者の解説・聞き取り、木工等の作業の視察と自らの体験、森や木以外の要素の組み入れ

参加者の声・反応や抽出された課題点

- 全体的には高い評価であったが、9つのプログラムで評価が分かれた。
- 移動の時間も含め、時間配分にも留意したい。
- 全体のストーリーをもっとわかりやすく、という声もあり、組み立て方に工夫が必要。
- 一般向けツアーとしては、できる限り専門用語を使わず、平易な説明を心掛けるようにする。

開発したプログラムの今後の展開案

- 「木地師」「マタギ」「実演・木工体験」は非常に評価が高く、これらの中核コンテンツとして考えていく。
- 草木塔と上杉伯爵邸(木造建築)に共通して浮かび上がる置賜地域の木材利用が、この地域を育む原点になったストーリーをさらに整理して企画に活かす。
- 保養・癒しの要素として森林セラピー基地も企画に取り込むことを検討する。

今後の参加者の募集方法・プロモーション案

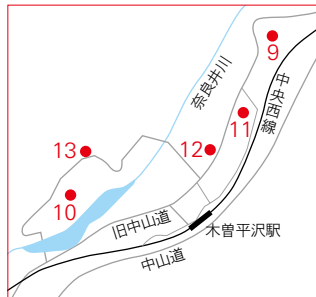
- 小国町、小国町観光協会、おぐに白い森(株)及び(株)小国町地域総合商社が連携して、ウェブサイトやチラシを使って募集。
- 多様な観光団体、移住促進団体、1ターン・Jターン等へ積極的なPRを行う。

信州 木曾平沢・奈良井宿 ～山深く 出会い深く「木のおもてなし」丸ごと体験の旅～

この地域は、木曾ヒノキ等の森林資源、街並みとして「木の文化」に触れられる中山道の宿場町、日常生活で「木の文化」に触れられる木曾漆器・曲げ物等の伝統工芸品を繋いできた地域です。日本海、太平洋へ水の流れを分ける大分水嶺の地で、海から一番遠く塩の道の終着地となったため、塩尻という地名になったと言われています。木材をはじめとした山の資源の活用が生活と経済の基盤であり、山の文化を理解するための代表的地域の一つです。木曾谷で生産されてきている木製品は、漆器・曲物等と食文化と関連しており、ユネスコ遺産にも登録された「和食」の特色である発酵・醸造文化を支える保存器具から調理器具、食器類や家具等はいずれも「木の文化」と密接に関連しています。

ツアーMAP

鳥居峠→中村邸①→公民館②→こころ音③
→小坂屋漆器店④→伊勢屋⑤→越後屋⑥→
いかり屋⑦→徳利屋⑧→諏訪神社⑨→木曾
漆器館⑩→丸嘉小坂漆器店⑪→伊藤寛司商
店⑫→大河内家具工房⑬→別荘「日々別荘」



鳥居峠

奈良井宿・木曾平沢の木の文化は、江戸時代に中山道の宿場町として発展したことまで遡ります。江戸から京に向かう旅人は、奈良井宿から蕨原宿へ進むのにこの鳥居峠を越える必要がありました。鳥居峠は木曾川と信濃川の源流奈良井川を跨ぐ大分水嶺でもあり、人や木材の流通のみならず、言語や食文化を語る上でも峠でした。木曾川流域の木材産地から鳥居峠を越える木材は、背負っての運搬となるため小物の加工用材になり、結果として奈良井宿は家具や小物等の産地になったことも特徴で、曲げわっぱなどの木曾檜物が盛んに生産されました。



街並みと中村邸

宿場町時代に造られた特色ある木造建築は、旅人をもてなす出梁造りや入口にはめられた大戸などが特徴的です。これが宿場町ならではの風景をつくりだしています。なかでも、櫛問屋を営んだ中村邸は、奈良井宿の典型的な町家の様式を伝えています。昭和44年にこの建物を川崎に移築する話が持ち上がり、これを機に奈良井宿の街並み保存の機運が高まり、国重要文化財に指定されました。50年前から街並みの価値を守り、引き継いできたシンボリックな建築といえます。



公民館

奈良井宿の中程、その昔は営林署のあった場所に街並み造りに配慮されて立てられた公民館。今回は信州そばアカデミーの赤羽理事をお招きし、「蕎麦の歴史と食文化」のお話を伺いました。現在では「そば」というと、細く長く切った麺状が一般的ですが、江戸時代初期頃までは、主に「そばがき」という練った団子状の形状が主でした。現在のそばは「蕎麦切り」と言い、一説では塩尻市の本山宿が発祥とされています。「蕎麦切りといっぱ(いうのは)、もと信濃国本山宿より出て、あまねく国々にもてはやされる。」と宝永2年(1705)の雲鈴の随筆「風俗文選」にも記されています。

こころ音

蕎麦処「こころ音」では木曾ひのきとそば道具の解説を聞きました。当初は蒸して供されていたとのことで、特別に、「蒸し蕎麦」の再現、そば粥、そばがき、現代の手打ちの蕎麦などの様々な蕎麦料理をつくっていただき、蕎麦の歴史と幅広さを体験しました。



小坂屋漆器店

曲物(木曾ヒノキめんば弁当)、そば道具の制作を行なっています。当主の小島氏は、原木の買い付けから木地加工、漆塗り仕上げまで一人ですべての工程をこなします。ヒノキ、サワラ、ネズコ、アスナロ、コウヤマキなどの希少な良材を独自に確保し注文に備えています。材料と同じように、道具への愛着も高く、先代より引き継ぐ物を手入れして、大切に引き継いでいます。



奈良井宿散策から宿へ

奈良井宿を観光協会のベテランガイドに案内していただきました。宿泊は、伊勢屋、越後屋、いかり屋の各宿。江戸時代から変わらない旅籠では、奈良井宿の伝統的な建築様式、2階がせりだした「出梁造り」、街並みの景観を揃える「千本格子」、漆喰の「袖うだつ」などを間近に見ることができます。



徳利屋

江戸時代に脇本陣を務め旅籠として利用された「徳利屋」は、文豪・島崎藤村、正岡子規が宿泊した宿です。時代を感じさせる囲炉裏や調度品は、一見の価値があります。ここでは木曾の食文化と木の文化を紹介していただきました。100年以上続く味噌麴生産者「小池糶店」、日本酒醸造「美寿々酒造」の主人も駆けつけていただき、歴史やこだわりの技法が紹介されました。夕食は木曾谷の郷土食、山菜、川魚、五平餅、差物のセイロで蕎麦を堪能しました。



諏訪神社

漆郷諏訪神社(木曾平沢)は、諏訪大社の分社です。400年の歴史を持ち、良き時も厳しき時も漆工芸の里を支えた、今も地域住民により大切に祭られています。



木曾漆器館

城下町ではなく、宿場町で発展したために実用漆器として発展したことが木曾漆器の大きな特色を生み出しています。実際に使用された道具と、使われていた品々の展示から、その歴史を体感することができます。木地加工、下地加工、上塗り、どれも手間のかかる工程だとわかります。樹液である漆を塗料としての漆に育てる工程も学べます。



丸嘉小坂漆器店

ガラスに漆を塗るといった新しい技法を開発、その特徴を活かしたデザインは国内外で高い評価を獲得しています。また、ガラスはフォークとナイフを用いる食事でも使用することができ、新しいシーンの演出を可能にしています。夏でも涼しげに漆器を楽しむことができます。



伊藤寛司商店

江戸から続く漆器店の典型的な構造を見学することができます。間口の幅で税が変わった江戸時代の名残で、通りの建物はどれも奥に長い形状をしています。通りに面した表が店舗、裏に漆を塗るための2階に大きな開口部がある特徴的な造りの土蔵の工房があります。「茜塗り」はこの工房独自の色合いで、その時を経る毎に艶を増す深い茜の色味は落ち着きがあり人気があります。



小坂箸生産者

代表的な工芸品である檜材に拭き漆で仕上げたヒノキ箸の工房です。漆の木から採取した樹液を精製濾過し水分を抜いた状態の生漆(キウルシ)を何度も塗っては拭き上げ乾燥(硬化)させます。地にしっかりと染み込んだ漆はヒノキを引き締め、より丈夫なものとしします。



大河内家具工房

歴史あるひき曲げの技法と新しいデザインを組み合わせ、家具の木地加工を行う工房です。若い職人を大切に育て、新しい取り組みにチャレンジする工房として各方面から注目されています。伝統的な木曾漆器木地加工を今にアレンジする発想は見事です。



別荘「日々別荘」

昭和初期に遠方に住む所有者の別荘として建てられた和洋折衷の建築物で、地元で「別荘」の愛称で呼ばれる建築物がリノベーションで蘇りました。今後は宿泊型の多機能コミュニティ施設として利用されることになり、今回のツアーではプレ企画として利用させていただきました。



郷土食×フレンチ

ツアー最後の食事は、長野塩尻に魅入られて1ターンしたフレンチシェフ友森氏による、土地の力を素材・伝統・文化といった幅広い観点で引き出し堪能できるスペシャルコース。こだわりの地の食材やツアーで出会った麴・味噌などが使われているのはもちろん、器にも木の文化が。木曾漆器青年部開発の「かしだ漆器」を使用した盛り付け、温めて香りを出した枝の切り株を器として使用するなど、枠に囚われない発想での木の文化が至る所に盛り込まれた。調理も、フレンチの技法を駆使する一方で、普段は使用しない木曾さわらの飯切で混ぜご飯もコースの中に組み込まれました。深い知見と愛情を感じる新しいフュージョンのあり方を感じられる食での締めくりとなりました。



地域の「木の文化」を活かした「木のおもてなし」ツアー 企画化【ワークシート】

信州 木曾平沢・奈良井宿 ～山深く 出会い深く「木のおもてなし」丸ごと体験の旅

【実施主体のポテンシャル】

（地域の森林・林業・木材産業の状況）

樹齢約200年生の木曾ヒノキ・サワラ等の針葉樹、ブナやミズナラ等の巨大な広葉樹の混交林

（実施主体の想い、ビジョン・将来展望）

森を育て、活用しながら共に生き、形成された日本の食文化を理解できる代表的な土地となる

（連携組織の想い、ビジョン・将来展望）

調理師養成施設協会—若年層が減少する中での、教育機関としての特色づくりの強化

（地域の観光産業・伝統文化等の状況）

重要伝統的建造物群保存地区に指定された宿場町、インバウンド客が多い、豊かな森林資源、職人の技と鉄分が豊富な錆土を活かし堅牢で評価が高い木曾漆器

【地域の「木の文化」のポテンシャル】

伊勢神宮の式年遷宮や社寺建築の用材である「木曾ヒノキ」、小学校の給食に木製漆器（箸、飯椀、汁椀等）の採用、地域おこし農家組合による朴葉餅、すんぎ漬け、サルナシ等の地元食材を活用、古くから漆器や檜物細工・曲物の一大産地、伝統的工芸品と若い職人の新技法や新製品の共存

地域の「木の文化」の基本コンセプト

ユネスコ遺産「和食」文化と連動した
「木の文化」再生プロジェクト

各要素を繋ぐ視点

木と食文化・地域とのつながりの可視化

【地域の観光・交流のポテンシャル】

「水木沢天然林」ガイドツアー（親子向け、一般向け等）、「中山道木曾路」宿場町ツアー（重要伝統的建造物群保存地区に指定された宿場町）、「宿場町のまちづくりワークショップ」（古旅館をシェアハウスを含む地域交流拠点として再生するため、地域内外の若者が参加してワークショップを実施）、毎年6月の「木曾漆器祭・奈良井宿場祭」は、3日間で3万人が来場、「木曾漆器づくり体験」（木曾くらしの工芸館）の箸の削り出しや漆で加飾の体験プログラム

【要素】塩の道

【視点】歴史背景理解

【内容】日本海、太平洋へ水の流れを分ける大分水嶺の地。海から一番遠い場所。塩の道の終着地（塩尻）。

【要素】山の食文化と木の道具の理解

【視点】伝統的食文化と土地のつながり理解

【内容】すんぎ漬け、朴葉餅、山の副産物の山菜料理

【要素】伝統食器の製造工程を理解する

【視点】木質食器の生産過程

【内容】漆器や曲物を生産する工房等を見学

【要素】森ヨガ体験

【視点】森の持つ健康や癒しの効果を知る

【内容】インストラクターの指導による、森ヨガの体験

（プロモーション手法）

体感施設で継続できるプロモーション手法等）
協会・施設などでの紹介、プロモーション

（「木のおもてなし」プログラムの確立・実施）

（「木のおもてなし」プログラムの確立・実施）
宿場町の伝統的建築物における漆器・曲物等を用いた木曾の食文化の体験、宿場町に宿泊した「木のまち」の生活体験、山の食文化とその背景を深く知るプログラムを試行体験するツアー

（ツアー等のターゲット・実施形態）

食のプロフェッショナル対象としたものにする。未来の食のプロフェッショナルとして、調理師も含む。

参加者の声・反応や抽出された課題点

- 歴史的町並みを歩いたり、ガイドの解説を聞いたことで、より魅力や愛着が深まったとの声が多かった。
- 奈良井宿という異次元の空間の中で食と木の文化が融合されたコンテンツは訴求力があるという意見があった。
- イヤホンガイドが聞きやすく好評であった。
- 木のおもてなしというテーマであるので、森に入ったり、木に触れたりという体験が欲しかったという声があった。

開発したプログラムの今後の展開案

- 「木曾暮らしの工芸館」のリニューアル計画と連動し、ハード・ソフト両面での食文化とつながるコンテンツの展開方法を確立する。
- 「日本遺産：木曾路」に関わる多様な観光・街づくり関係者との連携を検討する。
- （公財）調理師養成施設協会との連携で食文化との連動した木の文化を学べる仕組みを検討する。

今後の参加者の募集方法・プロモーション案

- 施設内でのパネル展示やパンフレット配布を実施する。
- ウェブサイト、SNS等での発信を充実させる。
- 地域内外の観光業者等と連携し、継続的にツアーを実施する。

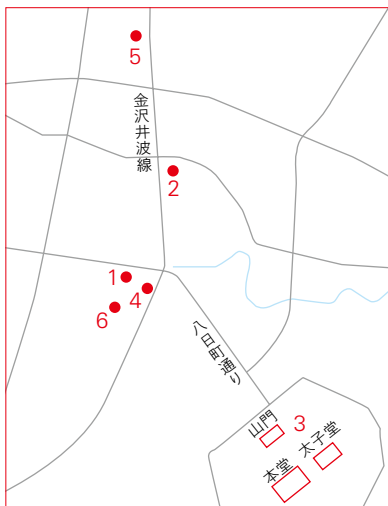
木彫りの里・井波 ～木の香りの旅～

瑞泉寺の門前町として栄えた木彫刻の街が富山県南砺市にある井波です。3度の大火災にも見舞われた瑞泉寺は、再建のために木材を主に五箇山地域から運び、卓越した技と人々の信仰を支えとして、この寺を継承してきました。当時の技は「井波彫刻」として、今もこの地に息づいています。200軒もある彫刻の工房には、職人技を学びに全国から人が訪れます。今回のツアーでは、五感をくすぐる「木の香り」と、瑞泉寺に見られる卓越した「木彫刻の技」の2つのストーリーから、井波を訪ね歩きました。

ツアーMAP

樽工房→交通広場①→八日町通り→
木彫刻工房→匠雲堂②→瑞泉寺③
→季の実④→nomi⑤→BED AND
CFART⑥

*⑤⑥は映像収録



芳醇なウイスキーの香り

～それはミズナラの樽が醸し出す

街の散策の入り口である井波交通広場（下段写真）から出発。まずは樽工房（写真上段）へ。地元の森林資源であるミズナラを使った樽でウイスキーづくりに取り組んでいます。ウイスキーの熟成された香味をつくるために樽の内面を熱で炭化させます。驚くのは、焼かれたミズナラでも、温度によって香りが違うことです。豊かな森が育む良質な水、井波の職人技を継ぐ加工技術が融合しています。



若々しい杉の香り～カンナかけ体験

匠雲堂(後述)では小型のカンナで実際に木を削ってみます。カンナくずを嗅いでみると、若々しい杉の香りがしました。



クロモジ茶の香り～野趣溢れる味で休息の時間

井波の木彫刻の木型で作った、彫刻クッキーとクロモジ茶でひとときの休憩です。クロモジは和菓子についてくる高級つまようじとしてなじみがありますが、乾燥させて裁断した枝を煮だしてお茶として楽しむことができます。口当たりも優しく、心落ち着く味がしました。



お香をいただく～自分の好みの香りを見つける楽しみ

仏教と共に広まった初期のお香は、平安時代には香りを楽しむ趣味としてのお香に変わっていき、鎌倉時代には武家の間で戦いの前の緊張を鎮める沈香として使われてきました。いにしえの人々も嗅いだであろうお香の香りは、樹種ごとにさまざまな特徴を持っていて、自分のお気に入りの香りを見つけることも楽しみです。



八日町通り～木彫刻の街の風景と音

瑞泉寺へと向かう坂を歩きます。石畳の八日町通りはまさに木彫刻の街・井波を代表する風景です。歴史を感じる工房や町家には鳳凰や七福神、動物の彫刻が掲げられています。通りのあちこちから、木槌の音が聞こえてきます。通りには木彫刻の猫がたくさん隠れていて、それを探しながらの散策もできます。



木彫刻の工房を訪ねる

寺社仏閣の彫刻を数多く手掛けてきた伝統ある井波彫刻は、時代や暮らしの変化に合わせて、現在では住宅欄間や獅子頭、インテリアまで幅広く制作しています。約200人の職人の工房が八日町通りを中心に軒を連ねており、木彫刻職人をめざす人が全国から集まってこの地で修行し、職人となって全国でその腕を振るっているそうです。井波で受け継がれてきた木彫刻の巧みな技が、今も全国の寺社仏閣などの彫刻に活かされ、日本の伝統や文化を支えているのです。



世界で唯一の彫刻刀の専門店～匠雲堂

優れた技を支える「道具」もまた重要です。匠雲堂は1975年の創業以来、彫刻刀や木彫り用具を専門に取り扱っている世界で唯一の店です。彫刻用具は1000種類以上。一流彫刻師の高度な要望に応えるため、手仕事でつくりあげるものもあります。今では世界中から買い付けの来客があるそうです。井波の技を支える道具の存在の大切さを改めて感じる空間です。



井波を代表する、瑞泉寺の木彫刻

瑞泉寺は、明徳元年(1390年)、本願寺5代綽如上人(しゃくによしょうにん)によって開かれました。宝暦12年(1763年)に火災で焼失し、再建のために京都本願寺の御用彫刻士・前川三四郎が井波に派遣され、4名の地元大工に技を伝承したことから井波彫刻が始まりました。前川三四郎の作が残る山門や、本堂、太子堂には井波彫刻の優れた技が随所に見て取れます。現在の本堂は、明治18年(1885年)に再建、木造建築寺院としては日本有数の規模を誇ります。太子堂は、大正7年(1918年)に井波の彫刻や塗師が集まり再建されたものです。時代の変遷とともに、そこに見られる作品もまた進化をしていることがわかります。奥行きのある立体的な造形は、実は一本の木から彫り出されたものだと知って、また驚くばかりです。



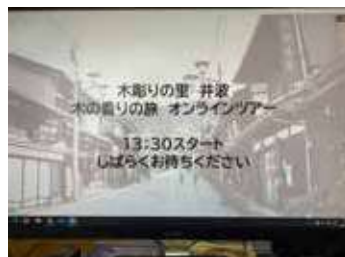
暮らしを彩る木のアイテムたち

ショップギャラリー「季の実」には、ここ井波の木彫刻職人の技を活かした器や小物など、地元作家による美しく、機能的なアイテムが揃っています。井波の伝統を活かしながら、季節を感じ、人の温もりを感じることができる、暮らしを豊かにするモノたちが待っています。



木に触れ、木でつくる～歴史と技を感じつつ

旅の締めくくりは、瑞泉寺内の瑞泉会館で、木のアクセサリやぐい呑みづくりです。木の持つ多彩な表情は、どんなアクセサリをつくらうかと考えさせ、ワクワクさせてくれます。慣れないノミ使いも職人さんの手ほどきで次第にきれいに仕上がるようになりました。旅の記念として、井波の記憶を留める自分だけの作品が完成しました。



木彫りの里・井波 オンラインツアー

リアルツアーで訪ねた場所を元に、オンラインツアーも実施しました。2時間で巡る井波の旅。普段はなかなか見られない職人さんの手元や木彫刻や建築の細かな部分などを紹介、現地の方に解説していただきました。アンケートでは、まだ行ったことがないが、是非、井波に足を運んでみたいという意見もありました。

地域の「木の文化」を活かした「木のおもてなし」ツアー 企画化【ワークシート】

木彫りの里・井波～木の香りの旅

【実施主体のポテンシャル】

(地域の森林・林業・木材産業の状況)

間伐等の森林整備、水源の涵養、土砂流出など森林の公益的機能の向上、木材関連事業の担い手減少

(実施主体の想い、ビジョン・将来展望)

木に関わる人口の増加、交流人口の増加、井波ファン増加、木の文化を活かした街づくり

(連携組織の想い、ビジョン・将来展望)

組織連携で井波ファンを育成、井波の良さをPRする井波人(いなみびと)の育成、案内人の増加

(地域の観光産業・伝統文化等の状況)

瑞泉寺の門前町の成り立ちから観光客は中高年の男女中心、日帰り中心、欄間の需要減少、新たな木彫刻ユーザー開拓が必要

【地域の「木の文化」のポテンシャル】

約250年前に再建した瑞泉寺の彫刻、日本一の木彫刻の街、八日町通りに井波彫刻の工房、木造りの天神様を贈る風習、日本家屋の欄間彫刻、約200人の職人、木材の生産から建築・彫刻まで一貫生産できる地域、木関連の事業者が多い、屋台彫刻の魅力 等

地域の「木の文化」の基本コンセプト

井波の見方(味方・魅力)、木に関わるプロの目録

各要素を繋ぐ視点

ノミだけで仕上げる木彫刻を見る・体験するだけでなく、立体彫刻や木彫刻品の年輪や木の節を活かしたモノづくりを知る

【地域の観光・交流のポテンシャル】

木のぐい呑みづくり体験、木彫り習塾、木彫刻体験、着物体験まちなみ散策ツアー、井波観光ガイド、世界遺産・五箇山の合掌造りなどの歴史、砺波市庄川の挽物木地、南砺ミズナラの木樽でウイスキーづくり、井波彫刻まつり、南砺市いなみ国際木彫刻キャンプ 等

【要素】井波彫刻

【視点】彫刻職人の視点

【内容】職人のこだわりを知る

【要素】井波彫刻

【視点】生活者の視点

【内容】普段使いの木のスプーンづくりから木を知り、木の愛着を持つ

【要素】瑞泉寺

【視点】木のプロの視点

【内容】大径木を使用した社殿づくりから彫刻の精密さ、大棟壁などのストーリーや見所

【要素】八日町通り

【視点】歴史的な視点

【内容】井波彫刻の工房が軒を連ねる通りを歴史的なストーリーと井波彫刻に触れる

(活用可能なPR媒体、連携団体等)

南砺市観光協会、南砺市商工会井波支部、とらみ衛星通信テレビ、日本橋とやま館、日本遺産井波のHP

(プロモーション手法)

体感施設で継続できるプロモーション手法等)

木彫刻の体験イベント、井波まぢめぐりイベント(職人と話ができる)

(「木のおもてなし」プログラムの確立・実施)

(「木のおもてなし」プログラムの確立・実施)

新規ガイドプログラムを開発し発行、オンラインツアープログラムの開発・発行

(ツアー等のターゲット・実施形態)

20～30代の男女、新たなガイドプログラムの開発・発行、普段は触れられない魅力を伝えるガイド育成

参加者の声・反応や抽出された課題点

- 普段、入れない場所を訪ねるなど、特別感のあるツアーであったこと、香りという現場ならではの要素に着目した点に評価が高かった。
- 木に触れること、井波の職人の技、木の香りなど、すべてが新鮮な体験だった。木工体験してみると、匠の技がいかに高度なものであるかがわかった。実際に話を聞くことで理解が進んだ。
- オンラインツアーは試行的であったが、リアルツアーとの組み合わせで相乗効果を生む可能性があると考えられる。

開発したプログラムの今後の展開案

- 昨今の感染症対策による「巣ごもり事情」から、室内の癒しアイテムとしての「香り」というキーワードは若い女性層に良い印象を持ってもらえると考えている。
- オンラインツアーで地域のことを知るきっかけをつくり、関心が高まったところで井波へ来ていただき、木の魅力を感じてもらえるような構成を考える。
- ツアーによって、潜在的な木の香りの記憶を持ち、ツアー後には身近な雑貨から家具、住宅まで木を使うことにつながる。

今後の参加者の募集方法・プロモーション案

- Facebookを中心としたSNSでツアー開催を発信し、まずは井波のファンに訴求することで、コストもかからず広がりが期待できる。
- オンラインツアーについては有償でもよいとの参加者の意見もあり、ツアーの充実化を図るとともに有償化も検討していく。

木のおもてなしツアーのつくりかた

4地域のモデルツアーでもワークシートを元に、木の文化に関連する地域の資源を整理・再編集をしながらツアーの組み立てを考えていきました。地域の宝は、地域の人が意外に気づいていないのかもしれませんが。それは外の目から見て、とても魅力あるものかもしれません。連携する方々と共に、ツアーの企画を考えるためのツールとして、下記のワークシートを是非、活用してみてください。

地域の「木の文化」を活かした「木のおもてなし」ツアー 企画化 【ワークシート】

【実施主体のポテンシャル】

(地域の森林・林業・木材産業の状況)

- 現在の状況はどうなっているか
- 特徴や特性、差別化のポイント
- 課題である点、優位性のある点

(実施主体の想い、ビジョン・将来展望)

- 「何のために」「誰に対して」「何をするか」
- 目指す将来像の明確化、可視化、言語化

(連携組織の想い、ビジョン・将来展望)

- 「何のために」「誰に対して」「何をするか」
- 目指す将来像の明確化、可視化、言語化

(地域の観光産業・伝統文化等の状況)

- 現在の状況はどうなっているか
- 特徴や特性、差別化のポイント
- 課題である点、優位性のある点

【地域の「木の文化」のポテンシャル】

- 以下の視点から地域の木の文化に関わる資源の調査、取材、分析を実施
- 地域の森や木に関わる歴史・風土の特徴
- 地域の森や木を活かした生活・風習の特徴
- 地域の森や木を活かした産業・生業の特徴

地域の「木の文化」の基本コンセプト

来訪者へ伝えたい地域の木の文化の「価値」を言語化。「ひとことで伝わるわかりやすさ・世界観」「未知の面白さ、意外性、驚き」を大切にする。

各要素を繋ぐ視点

各要素は、「ひとつの物語」を構成する「ひとつの章」のようなもの。物語を貫くテーマは何か?を明確にする。

【地域の観光・交流のポテンシャル】

- 以下の視点から地域の木の文化と関連する観光・交流の取り組みの調査、取材、分析を実施
- 地域の「木の文化」を活かすプログラムの状況
- 実績ある近隣地域の観光資源等の「木の文化」の特徴
- 実績ある「木のおもてなし」体感施設のプログラム等の特徴

【要素】 ●●●体験、●●●散策、●●●飲食など
【視点】 木の文化との接点から、体験や経験を通じて何を感じて欲しいか
【内容】 どんな場所で、誰の手による、どのような体験を提供できるかを抽出。季節、時間、選択肢の有無も。

【要素】 ●●●旅館、●●●伝統建築、●●●工房など
【視点】 木の文化との接点から、何を伝えたいか
【内容】 具体的な見どころやポイント、特徴や史実などを抽出。伝え方の工夫やわかりやすさ、見せ方の方法なども検討。

様々な角度からたくさんの要素を出してみる

(活用可能なPR媒体、連携団体等)

- 旅行やインバウンド向けSNS、サイトの活用など多様な発信ルートを探る
- 都市部や近隣観光地との連携
- ショップ、空間、施設からの発信
- 連携団体・組織の顧客や関係者の参加促進

(プロモーション手法)

- 体感施設で継続できるプロモーション手法等)
- 施設来訪客に参加を促すPRツールの検討
 - パンフレットやウェブサイトなど施設に関連する既存ツールの有効活用
 - SNS等、来訪客のスマートフォンからの情報入手経路の分析と活用

(「木のおもてなし」プログラムの確立・実施)

- 各要素をターゲット等に合わせて取捨選択、時間、移動、コストも含めてパッケージ化
- ガイドやファンリテーターなどの人材発掘や育成の仕組みを検討
- 試行ツアーやモニタリングを通じて、ツアー内容を精緻化
- 来訪者のニーズ調査やツアー後の感想・意見の収集と分析、フィードバック

(ツアー等のターゲット・実施形態)

- 「テーマ」「メニュー」「ターゲット」「時間・日数」「参加人数」等の設定
- リピーターや立ち寄り観光、情報熟度の高い顧客や富裕層顧客など、ポテンシャルに合わせた実施形態の検討

【考察】木のおもてなしツアー企画化のヒント

モデルツアーの成果分析や検討委員会の助言から、ツアーの企画を考え、アップデートを図っていくためのヒントをキーワードごとにまとめました。

わかりやすく伝え、
たくさん感じてもらう

伝える側は多くのことを伝えたいと思いがちだが、旅を楽しみに来る来訪客(インバウンドも含めて)の多くは専門的なことに詳しくありません。知りたいと思う気持ちを喚起するために、わかりやすいキーワードで解説や案内をしましょう。聞いている時間よりも感じてもらう時間を多くとりたいものです。

ひとつのアイデアが
いくつにも変化する

ツアーで行く場所や体験するプログラムが同じであっても、地域の地理や気候を活かした「季節限定の内容」や「地域独自の慣習・風習・行事」等との連動で、リピーターでも異なった体験ができ何度でも楽しめます。その時期だけ、この場所だけ、といったコンテンツが木の文化の奥深さを感じさせるはずですよ。

内容に合わせた参加人数の
設定や気軽な体験も大切

体験・視察プログラム等の場合、参加人数と内容の密度が反比例することが多く、参加人数の設定には配慮して満足度の向上を図りましょう。情報が届きやすいよう、音声ガイド機器なども普及しています。近隣の著名観光地からの誘客なども考慮し、気軽に立ち寄って木の文化に触れられるものや日帰り・1泊2日、中長期滞在型などターゲットとニーズに合わせて柔軟な構成を考えましょう。

重要なことはストーリー、
川下からのアプローチ

地域の持つ木の文化のストーリーを辿っていくには移動や時間、参加者の体力などが関係してきます。現代の暮らしに生きる木のおもてなしや製品・空間を入口にして、素材加工や作り手の技、そして森林へと遡るパターンがあってもよいはずですよ。現代から歴史的な木の文化に辿りつくツアーもユニークかもしれません。

情報の入手経路はSNSが主流
発信のしかたに工夫を

InstagramやFacebookなどのSNSで旅の情報を得ることが主流となった時代。幅広い層への情報伝達はこうしたソーシャル・メディアの活用が有効です。行きたくなる場所、撮りたいスポット、特別感や限定感をうまく伝えて、参加者自らが発信したくなるようなきっかけを生むことがポイントですよ。

家に帰ってからも木のおもてなしに
触れられる工夫を

ワークショップなどの体験プログラムは、木のおもてなしを「自分事」にする重要な役割があります。体験と購入の場を近づけていくことも大切です。自分でつくった木製品を持ち帰ったり、気に入った製品をすぐに購入できる仕組み(ネット通販等も活かして)を整備することで、家に帰っても、地域の木の文化・木のおもてなしに触れることができ、日常体験となっていくのです。

時代に呼応した、木の文化×○○
が求められている

モノからコトへ、と言われて久しいですが、健康・癒し・発見・学びなど、時代のニーズに合ったテーマと木の文化・木のおもてなしの融合を考えましょう。多様な分野の事業者・専門家・クリエイター等に協働チームに参画してもらい、外からの目、デザインの目を取り入れて、ツアーの質を向上させましょう。

オンライン・ツアーを
うまく活用する

リアル・ツアーとオンライン・ツアー、それぞれの長所を組み合わせ、うまく活用しましょう。オンラインで映像等を駆使して、普段は見られない職人の手元や建築のディテール、ドローン映像などで地域を知るきっかけをつくり、現場で本物の木の魅力を感じてもらえると感動も倍になるでしょう。

社会のために、人々のために、
が価値の最上位に来ている

ミレニアル世代・Z世代と呼ばれる、これからの社会の中心的世代の価値感とは過去と全く異なります。社会貢献性や環境保全、コミュニケーションや共有を最も優先すべき価値と捉えています。木の文化が地域や社会にもたらしてきた価値、これからもたらす価値にしっかりと光を当てて、それを伝えることがとても大切です。

木の文化・木のおもてなしの発展へ向けて ～検討委員からのメッセージ



ここで紹介された木の文化は地域の持つ多様な断面のひとつに過ぎない。その地域が今日に至るまで形成された「風土」を探っていけば、さらに広域的な木の文化を発掘することができるだろう。風土に根差した、地域の様々なストーリーを組み合わせていけば、より魅力的なツアーが生まれると考えている。—— 涌井雅之（造園家）



今後、取り組むべきは、子どもたちを対象にしたプログラムである。ものをつくるという視点を取り入れることが、文化や技の継承の点でも大事なアプローチであり、木に対する思い入れが芽生えるきっかけをつくってくれるはずだ。これを広めていく必要があるだろう。—— 赤松明（ものづくり大学学長）



日本の木の文化を語る際に欠かせないのが、里山と暮らしの関係だ。森に手を入れることで環境の保全や循環と経済効果を両立させてきた。今回のツアーにはそれを感じさせるものがある。現代は、山村にいながらにして様々な情報や技術が手に入る。これからは豊かな森林資源と情報を結びつけた新たな取組が生まれるだろう。それをつなぐ役割が木なのだと思う。—— 隈研吾（建築家）



すべての地域に行ってみたいと思える魅力的なツアーが多かった。素材としての木の利用価値ではなく、ミレニアル世代の価値は今までと違う、社会や他者への貢献が最上位の価値と捉えている。その取組がいかにか社会に役立つか、文化や技を守るのか、人々の生業を持続可能なものになっているのか、それこそを訴求していくべきだと考える。—— 戸村亜紀（コンセプター）



文化の深い部分を解説して、それを理解することから、新しいアイデアが生まれてくる。知らなければ平凡なものしか生まれてこない。文化・歴史にこそ、多様なヒントがあり、そのためには勉強しなければいけない。名目上は外国人のためであっても、最も利を得るのは日本人でしょう、と私はいつも思っている。—— デービッド・アートキンソン（小西工芸社社長）

観光地の風景の把握だけではなく、木の文化に焦点を当てたツアーという点に価値がある。こうした分野に興味関心を持つ来訪者を探していきたい。文化の伝播も含めてストーリーをつくっていけば、面白いツアーになると思った。—— 一般社団法人 日本旅行業協会 理事長 志村格

テーマ別観光という意味では、盛りだくさんのメニューになっているが、これをわかりやすい商品に仕立てていくための取捨選択をどうするかを考えていくことが大切だと思う。—— 公益社団法人 日本観光振興協会 特別参与 相京俊二



モデルツアーの事例はいずれもレベルが高く、こうした事例に学び、地域の魅力を整理整頓して、独自のモデルを考えていくことで他の地域のレベルも上がっていくだろう。地域資源としての木を本気で使って、懐かしくて新しい街をデザインしていけば、素晴らしい観光拠点ができるのではないだろうか。—— 水戸岡鋭治（デザイナー）

フルコースのツアーだけでなく、軽いランチのような、気軽に立ち寄った際に地域の木の文化やおもてなしに触れられるようなものをつくっていくことも大切だ。実施回数や参加人数などを考慮したプログラム構成も考えていくとよい。—— 公益社団法人 国際観光施設協会 副会長 大内政男

モデルツアー映像の紹介

以下の2地域は今回のモデルツアーをプロモーション映像化しました。



信州 木曾平沢・奈良井宿 ~山深く 出会い深く「木のおもてなし」丸ごと体験の旅~

木の文化・木のおもてなしウェブサイト

<http://www.green.or.jp/topics/omotenashi/>



木彫りの里・井波~木の香りの旅

2018、2019の事業紹介



2018年度事業

事例調査、取材等を通じて、仮想的な「木のおもてなしストーリー」を構築しました。「木の文化」を活かした「木のおもてなし」を促進するための基本的な考え方や視点、展開モデル、参考事例を紹介した「ガイドブック」、「コンセプト映像」、検討委員の「特別インタビュー映像」を制作しました。



2019年度事業

地域内に集積された「木の文化」を再整理・再編集して、「木のおもてなし」を体験する「モデル事業実施地域」を募集、全国4地域でワークショップ等を開催しました。プロモーション映像制作、検討委員による「公開座談会」の開催とともに「ガイドブック2019」を制作しました。



木の文化・木のおもてなしガイドブック 2020
【木のおもてなしツアーのつくりかた】

発行元：公益社団法人 国土緑化推進機構、株式会社 ユニバーサルデザイン総合研究所 林野庁補助事業
デザイン：則武弥（ペーパーバック）
印刷・製本：株式会社サンワ
記載内容：写真等の無断転載・複写を禁じます。



